

学び方を学ぶ

総合的な学習の時間

—こどもの興味・関心に基づく課題解決学習—



北海道教育大学岩見沢校理科教育研究室・

岩見沢市立メープル小学校

学び方を学ぶ総合的な学習の時間
— こどもの興味・関心に基づく課題解決学習 —

<この冊子をお読みくださる方へ>


この冊子は、北海道教育大学岩見沢校理科教育研究室と岩見沢市立メープル小学校によって、1999～2001年度に行なわれた共同研究の成果にもついています。2002年から完全実施される新学習指導要領では、教科教育の時間の大幅な削減と総合的な学習の時間の導入が注目を集めています。特に、総合的な学習の時間については、こどもの興味・関心から出発する課題解決学習などの体験学習的な要素を取り入れることが期待されていますが、はたしてそのような学習形態が、学校現場でうまく機能するのかどうかを危ぶむ声も多く聞こえてきました。

私達は、そのような中で

- 1) こどもの興味・関心による個別テーマ（フリープラン）の課題解決学習
- 2) 学習内容ではなく、学習方法の修得に重点を置く教育活動のあり方をテーマとして、文字通り手探りの追究を行ってきました。

私達の研究には、付属学校や研究パイロット校などではない市中の普通の学校での実践として、ある程度の希少価値があるのではないかと考えています。そこで、研究はまだ完成の域には達していませんが、仮に小規模校の一実践報告に過ぎないとしても、情報を提供していくことに意義があると判断し、現時点での研究総括のダイジェスト版としてこの冊子を作ることにしました。私達は、ご覧になられた方から多くのご意見をいただき、研究がより深まることを期待しておりますので、是非忌憚のないご意見をお寄せいただき、私どもの討論におつきあいくだされば幸いです。

研究代表者：北海道教育大学岩見沢校理科教育研究室 能條 歩



**スタートは指導者の
“概念転換”から**

完全フリープランによる課題解決学習は 実現可能ぞう

- ✓ 完全フリープランとは、課題解決における課題を教員が用意するのではなく、こどもが自分の興味・関心に基づいて組み立てて取り組むものです。
- ✓ いろいろと難しい実践ではありますが、
 - ・（教員がさせてみたいことではなく）こどもがやってみたい課題にとりくむ
 - ・探究内容そのものを学ぶのではなく、探究の方法論を学ぶ活動と位置づける
 - ・課題を解決できなかったとしても失敗と考えない
 - ・完全なこども任せの体験学習としないなどを前提とすることで、実施は十分に可能です。

「知らない事には対応できない（教えられない）」という姿勢から脱却しまあ

- ✓ 完全フリープランだと、教員がよく知らないことをこどもが課題にすることがあります。そのような時には、「自分には指導しきれない」と不安に思う場面が出てくるでしょう。しかし、「こどもと共に学ぶ」という姿勢を持てれば大丈夫。先生は必ずしも「教える」だけが仕事ではないはずでず。「育てる」部分に力点を置き、自分の知らないことを課題にしたこどもには、多いに学ばせてもらいましょう。こどもと一緒に探究を楽しむ気持ちが大切です。

「“学び方を学ぶ”という方式には教えるべき内容がない」というのは、誤解です

- ✓ 教科教育では、それぞれ考え方や学び方に関する独特の方法論（お作法）があります。こどもも先生も、暗黙のうちに、国語の時間には国語の、理科の時間には理科の方法論をもって授業に臨んでいます。ですから、そこでは「どんな方法論を用いて課題を解決するか」はほとんど問われません。このように、こどもたちには「ある場面で、どんな探究方法を選択するか」を自分で考えて実行してみるという機会があまり与えられていないと思いませんか？このことが、学校で学ぶさまざまなことを日常生活にうまく生かすことができない原因の一つではないでしょうか。

- ✓ ところで、現実の社会生活はどうでしょう。「何かをやりたい」とか「当面する問題を解決したい」などと思った時、どんな方法を用いて何をすべきかは自分で判断しなければなりません。その場面で誰かが「この場合は理科で習った考え方を使えばいいんだよ」と教えてくれるとは限りません。むしろ教えてもらえないことが多いのではないのでしょうか？こう考えると、こどもには学び方を選択したり方法論を模索させるような体験が必要といえそうです。つまり“学び方を学ぶ”という方式には、「自分の行動を自己決定させるための手段を獲得させる」という重要な教育内容があるのです。

このような学習をおこなうためには、総合的な学習の時間はまさにうってつけの時間と言えます。

こどもの話をよく聞いて、じっくり寄り添うことが、指導の基本となります

- ✓ 日常の授業では、先生がこどもに行動を指示している情景が普通でしょう。しかし、この学習形態では、「何を課題にしたいのか」、「どこまでやり遂げたいのか」、「どういう方法でやってみるのか」などについて、こどもの話をよく聞いて相談相手になったり、教わる側に回って疑問をぶつけてみたり、という場面が多くなります。必然的に、一人ひとりのこどもをよく観ることになり、こどもの違った側面に気付くことができます。

大規模校でも実施は可能です

- ✓ 学級のこどもの数が多いと、一人ひとりにじっくり寄り添うのは困難かもしれません。確かに、こどもが探究のための課題を設定するまでの期間は、個別指導が必要ですから大変でしょう。しかし、うまく課題が定まれば、もともと本人が探究したかった内容のはずですから、こどもは自分なりに何とか探究を進めるようになります。つまづきがあってもうまく進められない子も出てくるかもしれませんが、それは教科教育でも同じことで、特にこの方式の困難性ではないはずです。繰り返しになりますが、課題を解決することではなく、方法論を学ぶことを第一に考えれば、つまづきも失敗ではなく重要な経験なのです。